

# THE GRANPHONIC CONCERT 14th

グランフォニック 第14回定期演奏会  
2017年1月14日(土)  
東海市芸術劇場大ホール

## ごあいさつ

本日はグランフォニック第14回定期演奏会にご来場賜り、誠にありがとうございます。

1996年東海在住の全国の主にグリークラブ出身者で創立以来、今年で23年となります。これも皆様の温かいご声援の賜物と深く感謝申し上げます。

2000年、造語ですがGrand（雄大な）、Phonic（豊かな響き）でGRANPHONICと改名しました。

1年半ごとに定期演奏会を開催し、創作・編曲に限らずオリジナル作品を必ず発表、ドイツ語（または他の外国語も含めて）の曲にも取り組んでおります。

今回はここ東海市の劇場で新たに井原義則先生を総合演出としてお迎えして、3人の指揮者、3人のピアニストで、ステージごとに違う音色をお楽しみいただければと猛稽古を重ねてまいりました。

どうぞ最後までお楽しみください。

グランフォニック 団長 間瀬 譲

# PRO

## グランファーレ序曲

原詩：F. v. Schober

作曲：なりた まさと

指揮：成田 正人

ピアノ：はやせ ようこ

## 「淡彩抄」

作詩：大木 惇夫

作曲：別宮 貞雄

編曲：北村 協一

- I. 泡
- II. 螢
- III. 入墨子
- IV. 涼雨
- V. 別後
- VI. 燈
- VII. 天の川
- VIII. 青蜜柑
- IX. 鷺
- X. 春近き日に

指揮：小嶋 聡

ピアノ：鈴木 美智子

## GRAM stage 3

## stage 2

男声合唱とピアノとモノローグによる  
「詩人の恋」

詩：Heinrich Heine

曲：Robert Schumann

編曲：佐渡 孝彦

モノローグ構成：なりた まさと

1. この美しい五月に
2. 僕の涙から花たちが  
(Pf) 愛するものはただひとつ
3. 君の瞳をみつめていると
4. 僕の魂をひたそう
5. 怨むものか  
(Pf) 知っているのは唯ひとり
6. あの歌が聞こえてくると
7. 光輝く夏の朝
8. 夜ごとの夢に君をみた
9. 巨大な棺桶に入れるのは

詩人：井原 義則

指揮：成田 正人

ピアノ：丸山 晶子

..... 休 憩 .....

ミュージカルの名曲による替え歌集  
「ある男の恋物語」

構成・台本：井原 義則

作詩／井原 義則；鼓 あかね

編曲：向川原 慎一

1. 女には近づくな  
「ニュームーン」より「*Lover Come Back To Me*」
2. まさかこの俺が  
「ウエストサイド物語」より「*Maria*」
3. 頑なだった俺の心  
「オペラ座の怪人」より「*Music Of The Night*」
4. 幸せの街  
「マイ・フェア・レディ」より「*君住む街角*」
5. 俺は今何を見た  
「キャッツ」より「*劇場猫ガス*」
6. こんなものさ女は  
「コーラスライン」より「*One*」
7. 性懲りもない俺  
「レ・ミゼラブル」より「*Stars*」
8. もう独りじゃない  
「回転木馬」より「*You' ll Never Walk Alone*」
9. 愛を信じて  
「ラ・マンチャの男」より「*The Impossible Dream*」

指揮：向川原 慎一

ピアノ：はやせ ようこ

女：伊東 佳代

男：井原 義則

総合演出：井原 義則

照明：古川 靖 (株)若尾総合舞台)

舞台監督：磯田 有香

## 淡彩抄を演奏するにあたって

日本歌曲として知られる淡彩抄を男声合唱で演奏してみたいと言うと、「えっ!？」と答え、続けて「聴いてみたい!」と皆が言ってくれた。青年の情念と、恋の矛盾と苦悩がそこはかたなく匂い立つ、そんな詩とメロディが男声の密集した音の中に醸し出されることへの期待と受け取り、色々な方の後押しもあり取り上げることにした。

学生の頃、何の背景も持たず、一度詩を読んでみると、恋を季節で表現したり、日本語特有の隠語、例えば平安の頃より用いられる“螢（螢火）”は恋の情熱であったり、“雨”や“濡れる”という言葉が悲しみ・涙や、はたまた二人の情事のことをさしたりもするが、それらを用い、水墨のような色彩、そして温度感というか日本ならではの湿度感が端々から感じられ、そこに男性の恋患う心が見え隠れするのが読み取れたのを記憶する。

### 淡彩抄

大木 惇夫

#### IV 涼雨

月あかる夜を  
雨は過ぎけり

さやさやに

小竹もゆれけり

螢火も

流れさりけり

きみも行きけり

#### VI 燈

蝸すけて

みる

草のゆれ

ゆめ

うつつなる

朝靄に

燈

のこる

すすしさよ

#### IX 鷺

ふゆのみぎはの

ゆふあかり

はやきえぎえの

あしの間に

ひそみてあをし

鷺のかげ

あかるきかたや

ゆめみてか

#### X 春近き日に

あ、野晒らしの冬の巢に

風にふかるる星さむき

柀の葉の棘いたき

せつなきこひをするからに

雪割草の咲く見れば

はやきえぎえの霜見れば

涙ながれてとめあへず

きみよ目醒めてよりそへよ

目醒めかなしき朝ながら

わが世の春も近からし

光の鳥はとびかひて

あんずの小枝ゆれやまず

あんずの小枝ゆれやまず

III 入墨子  
惚れてみる君のうなじに  
入墨子あおくかなしき  
螢とし見ゆる夜もあり  
蒼蠅とし見ゆる夜もあり  
かつ憎みかついつくしむ  
入墨子げにもかなしき

V 別後  
いづれのあたりに  
濡れやしたまふ  
月夜の雨に  
山梔子の  
しろき花をかざして  
ああ きみは  
うすき衣に  
野の香をとめて  
いづれのあたりに  
濡れやしたまふ

VIII 青蜜柑  
湯あがりの肌のさむさよ  
みかんの青さよ  
甘酸ゆき香にむせて  
今はひとりよ  
埋火も消えはてて

夜の壁の影もひとりよ

～淡彩抄を追って～

### ■淡彩抄の生立ち

別宮貞雄は1948年東京大学文学部美学科に在籍中、音楽コンクールの室内楽部門へ応募するために淡彩抄を作曲した。結果第一位（歌唱は内田るり子）となり、以来、畑中更予、伊藤京子、吉沢淑子、東敦子などの名歌手によって歌われ、代表的な日本歌曲となった。

作曲にあたり別宮は後に、「作曲家伊藤隆太氏にあって、彼の持っていた詩集、或いはノートよりうつさせてもらったのが、はじまりであったような気がする」、「はじめから10曲のつもりだったのか、いざ曲を作るときになって、この10曲にしぼったのか、そこいらのことは、記憶が曖昧模糊」と述べている。さらに「“淡彩抄”という名が、そこにあったものか、私が勝手につけたものか、それは忘れてしまった」とあった。何れにせよ20代の純情と矛盾を内に秘めた瑞々しい音楽は、大木惇夫（当時篤夫）の詩との偶然の出会いによって生まれたのである。早くよりフランス音楽に惹かれていたためか、フランスに渡る前のこの歌曲についてもその影響を受けているように感じられる。

別宮により作曲された10の詩のうち、大木の第一詩集『風・光・木の葉』（1925、30歳）に“螢”“涼雨”“天の川”、第二詩集『秋に見る夢』（1926、31歳）に“泡”“別後”“燈”“青蜜柑”“鷺”と8篇収められているが、5年後の1931年刊行された『大木篤夫抒情詩集』には前述の8篇の詩に『秋に見る夢』より“霜夜”、そして新たに“入墨子”“春近き日に”を加えた11篇の詩が、『淡彩抄』という表題をもって所収されているのである。それまでの詩を再編し『淡彩抄』とした理由を生い立ちとともに追ってみることにした。

（“霜夜”は別宮が書き写す時点で抜けてしまったのか、作曲するときに抜いたのかは不明である）

### ■大木惇夫としての『淡彩抄』

大木が16の時初恋に落ちた相手、慶子。お互いに強烈に惹かれあい様々な手で逢引を繰り返していたのだが、突如親の決めた相手と結婚しアメリカへ渡ってしまう。その反動か、逃避なのか、銀行員となるものの酒色に溺れ自暴自棄になっていく。ところがアメリカ

からの「きっとあなたに帰ります」の一言に大木はさらに悶えるのだった。アメリカに渡った慶子はすぐに肺結核を患いそれを口実に日本に帰国、大木と6年ぶりの再会を果たし、慶子の離婚後1919年ようやく結ばれる。しかし慶子の結核は既に重度のものとなっていた。

晴れて居を共にし生活するも、一時は安定していた慶子は臥しがちになり、いつかは慶子を失ってしまう恐怖に襲われていく。そんなとき北原白秋と出会い、詩人として生きることを運命づけられた。それから数年の後『風・光・木の葉』が完成、そしてさらにその1年半後に『秋に見る夢』が発刊されたのである。大木本人が語る彼の詩の本質、根幹である実生活の「リアリスティックな素描」が“泡”や“青蜜柑”、“涼雨”、“別後”などで慶子との過去の出会いと別れ、一人寂しく生きる様が表現されている。

慶子への愛は偽りのないものであったが、長年の献身と療養のための資金稼ぎに疲れ果てた大木は外へと向かい新しい愛を突き進み、後の妻となる幸子と出会い二重の家庭を築くまでに至ってしまった。“入墨子”は実際に墨子のある幸子の事を指し、二人の女性の間に垣間見る愛憎の感情に対する大木の葛藤が読み取れる。

その後慶子は直腸癌を発症し余命僅かと診断された頃、幸子に二人目の子供の懐胎が解る。大木の心は一層錯乱し、混沌とした。もう次の春を共に迎える事が出来ないかもしれない臥せる慶子と、冬の巣に待つ幸子との春が近い事、今にも崩壊してしまいそうな精神状態を綴った詩が“春近き日に”である。

第一詩集に捧げられた「君の詩は清々しい。そうして而も燐光の淡青色を潜めてゐる」という白秋の言葉に表れるように、繊細すぎるが故の愛情と苦悩、矛盾と後悔が入り乱れる感情が、繊美で優雅な言葉と透き通った自然のベールによって内包された青年の抒情詩、それが大木惇夫の『淡彩抄』ではないだろうか。

（小嶋 聡）

## 詩人は語る

今回は、声楽家（特に男性）であれば一度は歌ってみたいとされるロベルト・シューマンの『詩人の恋』にチャレンジします。第12回定期演奏会でブラームスの『運命の歌』を採り上げたとき、あとは『詩人の恋』に取り組むことができたなら思い残すことはないと思っていました。

実は、構想そのものは十数年前から持ちながら、なかなか踏み出せないでいたのです。それは、克服せねばならない大きな二つの課題に目処が立たなかったからです。一つは、ロベルトの意図に忠実で、その音楽を損なわない編曲楽譜がなかったこと。もう一つは、ドイツ語による全16曲の演奏（約30分）が、歌う側にも聴く側にも受け入れられるのか、自信が持てなかったことです。

ところが昨今事情が変わってきました。2007年に佐渡孝彦氏による、男声合唱を知り尽くした感のある編曲楽譜が出版され、一つ目の課題は解消。また二つ目に関しても、音楽物語を続けてきたことで、ストーリー性があれば1時間ものでも受け入れられるようになり、ドイツ語の処理さえ誤らなければ、声楽マニアの人でなくても楽しんで頂くことができるのではないかと感じられたのです。

二つ目の課題克服には少し複雑な要素が絡むので、もう一步踏み込んで記します。

ドイツ歌曲を演奏する場合、表現のアプローチには標題音楽のアプローチと絶対音楽的アプローチがあります。大雑把に言ってしまうと、歌詞の内容と旋律を対応させて部分部分を表情豊かに表現するのが標題的。反対に作品全体を大きく捉えて、やや器乐的に表現するのが絶対的。聴く側にとっては標題的の方が受け入れやすいですし、絶対的で魅了するには余程の声の技量が必要です。

普通はこれがある程度ミックスされて表現されるのですが、標題的に傾斜するということは歌詞が主、音楽が従になるということです。ロベルトはこれに反発し、一連の歌曲を「言葉からのインスピレーションは得るが、言葉への隷属はしない」という意思を持って書いたようです。これはピアノ部分が単なる“伴奏”になっていないことにも繋がります。

但しこの“音楽優先”は、時代的背景を考慮する必要があります。詩の朗読会が頻繁に催され、ハイネの詩など、いわば一般教養（常識）となっている人たちが聴くのですから、敢えて詩の内容を解説的に表現する必要はなかったのです。ロベルトも、まさか後に東洋の異国の地で、ドイツ語やハイネが日常的でない人たちの前で自分の作品が演奏されようとは思ってもみなかったことでしょう。（笑）

因って、我々の演奏会ではこの点への配慮をしないと、ロベルトの意図する音楽を充分に受けとめてもらえないこととなります。と言って、前もって朗読会を開いて詩の内容を覚えてもらうというのは現実的ではありません。連続する全体の流れを損なわないようにしながら、できる限り同時進行で作品のイメージを捉え、音楽の中へ入り込んでもらうにはどうしたら良いか。

そこで思いついたのが、このモノローグを挟み込む形式です。詩を朗読するのではなく、ストーリーの進行役。次に来る音楽のイメージを伝えお客様に心の準備をさせる役目を、この詩人が果たします。従って、詩人の言葉はハイネの詩そのものではありません。原詩を尊重しながら、日本人が理解し易く感情移入し易い言葉に置き換え、イメージが形成され得る最小限の語数に圧縮しました。曲目も若干割愛しました。「言葉には隷属しない」としたロベルトなら、こうした大胆な試みを許してくれると信じます。

今回は贅沢にも、演出をお願いした井原先生が、この詩人というナビゲーターを引き受けてくださいました。ピアノは、第12回定期演奏会で『運命の歌』を見事に表現してくれた丸山晶子さんをお願いしました。独唱とは一味違った、グランフォニックならでの『詩人の恋』をお楽しみください。

外見はさておき、我々のみずみずしい恋心を感じて頂ければ幸いです。

（なりたまさと）

## ミュージカルの名曲による替え歌集 「ある男の恋物語」

「もりトンカツ、いずみにんにく、かーこんにゃく、まれ天井…」という歌をご存知ですか。これは、懐かしのグループサウンズ、ザ・ブルーコマッツが歌った「ブルー・シャトウ」の冒頭「森と泉に囲まれて」という部分の替え歌ですが、きっと皆様の中にも、その昔、面白おかしく歌った記憶をお持ちの方がいらっしゃるでしょう。

この替え歌には深い意味はなく、単なる言葉遣いの遊びに過ぎませんが、みんなが面白がって歌ったのは、歌詞だけではなく、この歌のメロディーが持っている音楽的な魅力があったからこそと言えるのではないのでしょうか。

さて、映画や舞台で演じられたミュージカルには、人々の記憶に残る数々の名曲がありますが、それらはそのストーリーの流れや、俳優たちの台詞回し・歌唱力、印象的な場面の映像などと一体となって私たちに鮮烈な記憶を与えてくれています。たとえば「サウンド・オブ・ミュージック」の「エーデルワイス」はアルプスの山々の景色やトラップ大佐のギターの音色、子供たちとジュリー・アンドリュースの表情、ナチスが家族に迫る緊迫した状況などが思い出されますが、しかし、こんなに長く世界中の人々に愛されているのは、あの歌自体が持っている魅力があるからと言えます。さらに言えば、歌の一番大事な要素である歌詞を外してしまっても、そのメロディーとコード進行が私たちの心をとらえています。

このステージでは、そんな<歌の力>を確かめるためにも、本来の歌詞とは異なる状況のもとでいろんなミュージカルの名曲を歌ってみます。オリジナルに近い曲もありますが、全く違う内容の歌詞があります。恋の歌がコミカルな歌や自虐的な歌に変わったりもします。その意外性と新しい魅力の発見をお楽しみいただければ幸いです。

以下、原作の内容を簡単にご紹介します。

### 1. 女には近づくな

1930年「ニュームーン」から「[Lover Come Back To Me]

※(恋人よ私のもとに帰ってきておくれ)

### 2. まさかこの俺が

1957年「ウエストサイド物語」から「[Maria]

※ロミオとジュリエットを題材にした物語。初めて会った彼女の名前がマリアだと知り、嬉しさのあまりその名前を繰り返し呼んで恋の始まりを確信します。

### 3. 頑なだった俺の心

1986年「オペラ座の怪人」から「[Music Of The Night]

※オペラ座に住む謎の怪人が歌い手クリスティーンを地下の住処へ連れて行く場面で歌います。曲の美しさがストーリーの不気味さをいっそう際立たせています。

### 4. 幸せの街

1956年「マイ・フェア・レディー」から「[君住む街角]

※主人公の女性イライザに一目ぼれした男が彼女の家に行きますが、面会を断られ、それでも待ち続ける覚悟で歌います。ちょっとストーカーっぽい感じ? 今回のストーリーともぴったり合っています。

### 5. 俺は今何を見た

1981年「キャッツ」から「[劇場猫ガス]

※その昔俳優だった老いぼれ猫が、当時を思い出しホラも含めながら昔話を熱く語ります。

### 6. こんなものさ女は

1975年「コーラスライン」から「[One]

※厳しいショウビジネスの世界、オーディションを受けたダンサー達がそれぞれの自分の人生をみつめる話。そのフィナーレ曲です。CMソングとしても多用されています。

### 7. 性懲りもない俺

1985年「レ・ミゼラブル」から「[Stars]

※長年にわたって主人公ジャン・バルジャンを執拗に追いかける警察官ジャベールが、必ずあいつを捕まえてみせると星空に誓います。

### 8. もう独りじゃない

1945年「回転木馬」から「[You' ll Never Walk Alone]

※この曲も今回のストーリーそのまま、人生は独りじゃないと励ましてくれる名曲。今ではサッカーの応援ソングにもなっています。

### 9. 愛を信じて

1965年「ラ・マンチャの男」から「[見果てぬ夢]

※ドン・キホーテを描く劇中劇の中で歌われるテーマ曲でこのステージのラストとしてもふさわしい感動的な曲。

(向川原 慎一)

# PROFILE

**井原 義則** 総合演出  
Ihara Yoshinori



愛知県立芸術大学音楽学部声楽専攻卒業、同大学院修了。

ウィーン・ゲーテアニッシェスコンセルヴァトリウム卒業。洞谷吉男、故小島琢磨、神田詩朗、故木下武久、中田淳子、故ヒルデ・レッセル＝マイダン、児井恵の各氏に師事。

ドヴォルザーク「レクイエム」でデビュー後、

ベートーヴェン「第九」、ヘンデル「メサイヤ」などのミサ曲や合唱のソロを数多く務める。

また、オペラ・オペレッタ・ミュージカルなどの大役を数多くこなし、いずれも好評を博す。リサイタル・ジョイントリサイタルをはじめ、その他のコンサートも多数。また、オペラ演出家としても好評を博す。

第2回名古屋市芸術創造賞受賞。第2回名古屋市新進芸術家海外研修員として短期留学。1989年から3年間、あらためてウィーンに留学。

現在、愛知県立芸術大学・名古屋芸術大学常勤講師、南山大学エクステンションカレッジ、NHK文化講座講師。

名古屋市昭和 문화小劇場芸術アドバイザー

**向川原 慎一** 指揮  
Mukaigawara Shin-ichi



早稲田大学卒業。

現在「グランフォニック」など、7団体の合唱指揮・指導を務めている。

指導している団体用の編曲をはじめ、特殊な編成や事情の依頼による室内楽や合唱の編曲も多数。

また歌曲を中心とした作曲活動を続け、2007年、奏楽堂日本歌曲コンクール作曲部門（中田喜直賞の部）では谷川俊太郎の詩「はる」に作曲した作品が最優秀賞を受ける。

金子みすゞの一連の詩に取り組み、これまでに数十曲の独唱曲と女声合唱曲を作曲。その一部は2枚のCD録音と楽譜にして発表している。

小林研一郎氏に師事。

**成田 正人** 指揮  
Narita Masato



グランフォニック創設メンバーの一人。

慶應義塾大学在学中、木下保氏、畑中良輔氏らの薫陶を受け、指揮法を伊藤栄一氏に師事。学生時代より合唱指揮の傍ら作詞・作曲・編曲に勤しみ現在に至る。

編曲モノは数知れず、《生きるエネルギー》をお届けしたいと、シナリオ起こしから作曲まで自ら手掛ける音楽物語形式の作品も多数。代表作に“愛の三部作”『パパの子守歌』『絵描きと少年』『不破白人の恋』、盲導犬支援団体委嘱作『ハーネスで握手!』、常滑音楽祭委嘱作『ブチ・ハラハの謎』等々。

昨年某社の常勤監査役を退任し、音楽生活に没頭するのかと思いきや、別会社の中国法人の董事長として上海へ赴任。グランフォニックとも今宵を限り暫しの別れとなる。



**小嶋 聡** 指揮  
Kojima Satoshi

千葉県出身。幼少よりピアノを始め、主に歌とヴァイオリンの伴奏を独学で学ぶ。大学進学後、慶應義塾ワグネル・ソサイエティー男声合唱団に入団。畑中良輔、大久保昭男、北村協一、綱川立彦、佐藤正浩各先生に薫陶を受ける。大学合唱の傍ら、慶應義塾中等部コーラス部を指導し、自身が中等部生のために編曲した、ミュージカル「レ・ミゼラブル」などを指揮。今でも後進の育成に努めている。また、自らオーケストラ・合唱を主宰し、演奏会で披露、好評を博す。指揮を角田鋼亮氏に師事。



**はやせ ようこ** ピアノ  
Hayase Yobko

愛知教育大学音楽科、同大学院修了。

在学中より、名古屋二期会を始め、名古屋オペラ協会、三重オペラ協会など、主に東海三県にてオペラのピアニストを務め、現在はプロの伴奏ピアニストとして多数のステージに参加。

また名古屋芸術大学では、長年にわたりオペラ授業にて学生の指導に携わっている。

現在関わっている合唱団は5団体、そのほか、アンサンブルピアーチェメンバー、声楽グループPASSO A PASSO音楽監督、岐阜のチャリティコンサートでは毎年演奏と司会を担当している。

グランフォニックとは連続11回の共演となる。



**伊東 佳代**  
Itoh Kayo

俳優。日本俳優連合会員。名古屋放送芸能家協議会理事。日本舞踊を西川好弥に師事、西川流師範。

出演作品

名古屋市子供のための巡回劇場「白鳥の湖」のお話。音楽劇「照手と小栗」。ラジオ「みのひだらまん街道」。西川好弥台本演出「女心は鬼にも蛇にも」。伊藤晶子ソプラノリサイタル「オペラ白鷺幻想」の青おに役。クラシックバレエ「舌切雀」「ブンナよ木からおりてこい」。東彰治構成演出「にごりえ」。菊本健郎作演出「まつりびとの宴」。麻創けい子作演出「時代横町」1丁目から2020年の100丁目をめざし出演中。

しあわせ村、朗読あじさいの会、講師。



**丸山 晶子** ピアノ  
Maruyama Akiko

名古屋市立菊里高等学校音楽科を経て、桐朋学園大学音楽学部演奏学科を卒業。

ニューヨーク・マネス音楽院修士課程及びプロフェッショナルスタディース・ディプロマコース修了。

第11回多摩フレッシュ音楽コンクール入選。YBP国際音楽コンクール2004一般の部第3位。

桐朋学園大学ピアノ科卒業演奏会、読売中部新人演奏会、セントラル愛知室内楽シリーズ等に出演。

2008年NY・スタインウェイホールでのソロリサイタルをはじめ、2008年、2010年に宗次ホール、2014年電気文化会館でのソロリサイタルなど、東京・名古屋地区を中心に演奏活動を行う。

名古屋音楽学校講師。愛知ロシア音楽研究会会員。



鈴木 美智子 ピアノ  
Suzuki Michiko

慶應義塾大学文学部卒業。パリ・スコラカントルム・ピアノ高等専門課程修了。

マダム・モニック・メルシエに師事、帰国後は永富和子氏の薫陶を受ける。

歌や合唱の伴奏を中心に活動を続け、長年にわたり母校のコーラス部に携わる。

最近では、ヴァイオリンやピアノとのデュオなど、器楽アンサンブルの機会も多い。

歌曲アンサンブル研究会会員。



末吉 利行 バリトン  
Sueyoshi Toshiyuki

東京藝術大学卒業、同大学院オペラ科修了。

畑中良輔、平野忠彦、田中万美子、河合彰の諸氏に師事。ジローオペラ新人賞を受賞。

新国立歌劇場、東京二期会、藤沢市民オペラ等のプロジェクトにおいて活躍。モーツァルト、プッチーニ、ヴェルディ等の作品のほか、多くのレパートリーを持っている。

15年間連続で大学オペラ制作責任者を務め、本年9月、大学創立50周年記念オペラ《ラ・ボエーム》では制作責任者、兼マルチェッロ役を歌い、公演を成功に導いた。

ドイツ、フランス、日本の歌曲にも精通している。

愛知県立芸術大学教授、洗足音楽大学非常勤講師、NHK名古屋文化センター講師。

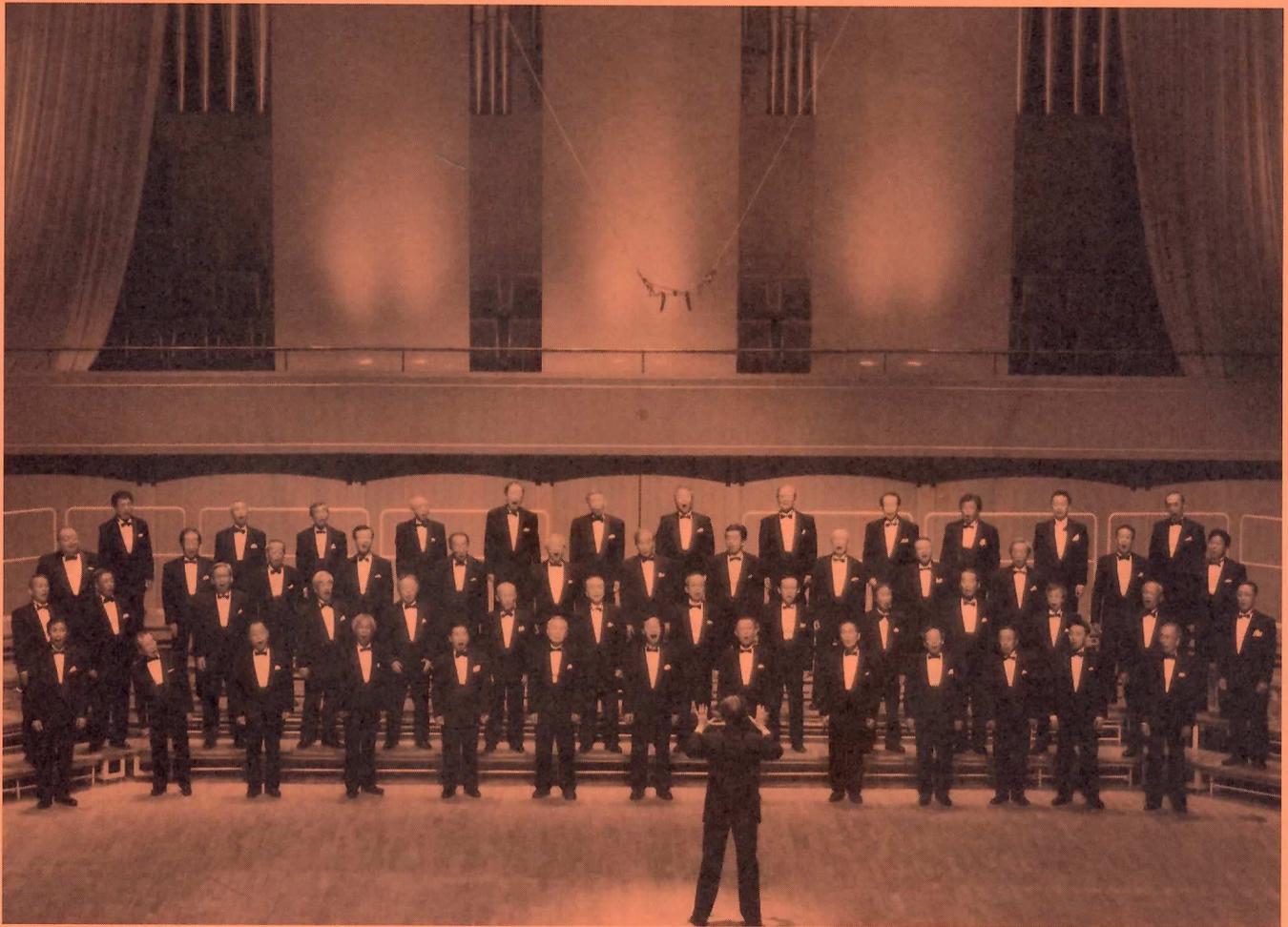
# THE GRANPHONIC

## グランフォニック

当団の前身である「東西四大学OB合唱団東海」が正式にそう名乗る前の頃、世の中にはJリーグスタートの余熱がまだ残っていた。そのせいか、当団は一時期「グランパスエイト」をもじって、「グランパスフォー」と称していた。そのグランパスもついにJ2に落ちてしまったが、当団はこの定期演奏会を機に、また新たな気持ちで活動に取り組もうとしている。ここ数年は団員の高齢化、団員数の減少、練習場所の確保等に苦労しているが、ボイストレーニングを始めとする音楽面の充実を第一に、ジョイントコンサートや合唱祭への参加等、徐々に活動の幅を広げてきた。何より歌うことが大好きな男達の集まりである。例え人生に悩み疲れていたとしても、ひとたびグラフォトーンに包み込まれば、なんともいえない高まりを覚え、明日に向かう力が湧いてくる。この力を原点に、これからも歌い続けていきたい。

さて、今回は日本の詩情を細やかに表現したと思ったら、ドイツに飛んで若き頃の瑞々しい恋心を歌い上げ、最後はプロドウェイでステップまで踏んでしまう。もともと生真面目できっちりとしたものではなく、オリジナリティーにあふれ、どこか遊び心があってシャレた演奏会を目指してきたわれわれにとって、「らしい」構成になっている。トランプ・マジックではないけれど、普段はしょぼくれたおじさん達でも、ステージに立つとステキに見えてくるからあら不思議。今日のこの時間、タネはわかっているけれどもわれわれのマジックにだまされてみてはいかが？

最後に忘れてはいけない大切なこと。それは、この男達を温かく見守ってくれた指揮者・演出家・伴奏者・スタッフの方々、家族や友人、歴史を作ってくれた天国の仲間達、そして演奏会に足を運んでくださったグラマニアの方々の存在。皆様のお支えなしに、われわれは歌い続けることなどできなかった。感謝の気持ちは今日全力で歌うことでお伝えしたい。「心こめ さあ届け ああこの歌」。



THE GRANPHONIC *T*<sup>1</sup>

THE GRANPHONIC *T*<sup>2</sup>

三ツ松 平 (名古屋市)  
 伊藤 高潤 (長久手市)  
 鈴木 英孝 (豊橋市)  
 小宮 俊英 (名古屋市)  
 石川 周二 (大府市)  
 中川 暢 (名古屋市)

鹿住 誠 (長久手市)  
 小林 武 (一宮市)  
 黒岩 実 (岡崎市)  
 榎本 真丈 (長久手市)  
 高津 真司 (刈谷市)

柴田 道昭 (名古屋市)  
 石井 清 (名古屋市)  
 新谷 岳史 (東京都)  
 飯田 公男 (名古屋市)  
 河内 幸雄 (名古屋市)  
 高橋 淳一 (大府市)  
 丸山 武夫 (名古屋市)

三ツ口 勝弥 (名古屋市)  
 成田 正人 (中国上海市)  
 間瀬 譲 (半田市)  
 松浦 治徳 (名古屋市)  
 大村 元 (横浜市)  
 松永 鐘治 (名古屋市)

THE GRANPHONIC *B*<sup>1</sup>

THE GRANPHONIC *B*<sup>2</sup>

黒田 泰男 (名古屋市)  
 長谷川 利孝 (春日井市)  
 細江 太喜雄 (名古屋市)  
 安田 俊哉 (北名古屋市)  
 天野 浩 (半田市)  
 荒田 武 (春日井市)

永井 一美 (大府市)  
 寺島 正晃 (長久手市)  
 水野 邦明 (日進市)  
 芝木 昌一 (名古屋市)  
 近藤 峯生 (名古屋市)

井ノ口 貴敏 (名古屋市)  
 外村 俊夫 (名古屋市)  
 犬塚 弘道 (長久手市)  
 成井 詔彦 (日進市)  
 村上 信 (名古屋市)

浅井 良之 (名古屋市)  
 松原 成憲 (名古屋市)  
 小嶋 聡 (日進市)  
 木村 文隆 (名古屋市)  
 渡邊 該 (東京都)

グランフォニック 第14回定期演奏会

# THE GRANPHONIC CONCERT 14th

団長  
幹事長  
幹事  
〃  
〃

間瀬 譲  
木村 文隆  
松浦 治徳  
松永 鐘治  
中川 暢

音楽スタッフ

指揮者 成田 正人  
〃 小嶋 聡  
レッスン・マスター 高津 眞司

パート総務

(T1) 石川 周二  
(T2) 河内 幸雄  
(B1) 近藤 峯生  
(B2) 村上 信

パートリーダー

(T1) 高津 眞司 (兼)  
(T2) 三ツ口 勝弥  
(B1) 長谷川 利孝  
(B2) 浅井 良之

名誉団員・指揮者 向川原 慎一

グランフォニックでは仲間を募集しています。

~~~~~  
【練習日】 毎週水曜日 19:00~21:15 (月1回土曜又は日曜日)  
【練習会場】 名古屋市音楽プラザ (金山) 他  
【団費】 月額3,000円  
~~~~~

【お問い合わせ】

グランフォニック

検索

<http://www.granphonic.com>

# THE GRANPHONIC CONCERT 14th

グランフォニック 第14回 定期演奏会

## 1st stage

### 淡彩抄

作曲：別宮貞雄  
作詞：大木惇夫  
編曲：北村協一  
指揮：小嶋聡  
ピアノ：鈴木美智子

## 2nd stage

### 詩人の恋

#### 作品48 男声合唱とピアノのための

作曲：ロベルト・シューマン  
作詞：ハインリヒ・ハイネ  
編曲：佐渡孝彦  
指揮：成田正人  
詩人：井原義則  
ピアノ：丸山晶子

## 3rd stage

### ミュージカルの名曲による替え歌集 「ある男の恋物語」

構成／台本：井原義則  
作詞：井原義則／鼓あかね  
女：伊東佳代  
男：井原義則  
編曲／指揮：向川原愼一  
ピアノ：はやせようこ

総合演出：井原義則  
照明：古川靖 (株若尾総合舞台)  
音響：吉田友和  
舞台監督：磯田有香

2017  
**1.14** (土)

4:00pm開演 (3:30pm開場)

東海市芸術劇場大ホール

名鉄「太田川駅」直結 (駅西側)  
「名鉄名古屋駅」から中部国際空港・河和・内海方面の特急で約15分



指定席A (1階) : 2,500円 指定席B (2階) : 2,000円

お問い合わせ：木村 tel:090-8673-6501  
THE GRANPHONIC <http://www.granphonic.com>